



一部50円です

井戸



昔、わが家には井戸があった。水道が出来るまで井戸は生活に欠かせないもので、街や田舎を問わず家の近くには必ずあった。家の井戸は、表の入り口ではなくて、裏口を出たすぐ近くにあった。周りをコンクリートで囲み、中をのぞくと石積みされた石のすき間からシダの葉がわずかなひかりを求めるかのように上に向かって生えていた。つるべはなくて、代わりに水をくみ上げる桶につないだシュウロの綱が井戸塀にくくり付けられていた、その井戸をのぞき込み井戸の底に映る顔を飽きずに見ていた思い出がある。

井戸水は暗い底にあって増えることもなく減ることもなく、年中枯れることなく静かにたまっていた。村の家々は、山からも清水を引き生活用水として使っていたから井戸水が欠かせないわけではなかったが、人々は井戸を大事に守っていた。そんなきれいな井戸も高度成長が始まり、茅葺屋根の家を瓦屋根に葺き替えられる工

事があちこちで始まると同時に不要のものとして埋め立てされてしまい、村には今は一つの井戸も残ってはいない。

私の脳裏に残る井戸の穴は、暗く深い底をのぞいた時のおそれと好奇心の入り混じった空間であった。庭にある池とちがい数メートルばかり深い穴底のために井戸の水面は波打たず鏡のように自分をうつし出すのである。雨が降っていても風が吹いていても井戸の底はいつもと変わらぬ静かであった。時たま小さなカエルが泳いでいるのを見たことがあるが、いつもは何の変化もなかった。

怒られたりして泣きそうになった顔で井戸をのぞく時は、顔が穴の中に生え出たシダの葉に隠れるように身を引くように見た。またうれしい時には、思い切り身を乗り出して熱心に顔を見ていたものだ。井戸の底はその時々、自分のところをみせてくれる鏡のようなものであった。

今も心の奥底にある井戸をのぞいて見てみたい自分と、映し出されるであろう自分の生きざまを正視したくない矛盾した自分がある。いまだに井戸に対して言いようのない畏怖の念があるのはその為なのだ。

連載 爺捨て山 15

梵店主

不景気が続き、金の工面に日々追われる
せいでもないだろうが、不安が心の底にた
まる。

人はそれぞれ思いがちがう。同じ人間で
あっても胸の内は計り知れない。その上時
が変われば心も移り変わる。だから、己れ
の人生を悲しんだり悔いたりする事も空し
いのだが、冬空を見ていると無性に後悔の
思いが頭をもたげてくる。

こんな救いようのない自分の気持ちを山
の神や仏にあずけて楽になりたい。こんな
情けない男のままあの世へ旅立ちたくはな
い。区切りをつけてこれでこの世は終いだ
と諦め切る。そんな強い思いを持ちたいと
願う。

そして、爺捨て山こそ、シャバとの未練
を断ち切り、自分と対座し何か得心できる
理想の場であると信じてしまう。

しかし、その逃げの思考に男の弱さをみ
てしまう最近の自分である。

爺捨て山に行けばと強い男になれる訳で
もなく、答えを見つけられる訳でもない。
では・・・どうなんだ？ と自分に問う。
どうなのか？

この『爺捨て山』を読んでいる皆様、ど
う思われますか？ 真のおおらかさは、強
さは、自分とどう向き合うことなのでしょう
うか。男はどうなるべきなのでしょううか。

ヒマラヤへの道 4

梵店主

その日暮らしのよっちゃんであったが、ヒマラヤ行きに五人もの同志を得た事は大変大きな意味があった。山岳会としては何も決まっていけないが、今後は協力者を増やしていけばよい。核になる人が出来て、よっちゃんが総会に出かけていった甲斐があったのである。問題はどのように登山隊を作るかである。

まず、登る山を決めなければならぬ。次に隊員を集め、資金資材を調達する事などを考えなければならぬ。また登山許可を、登る山がある国からもらう必要がある。実は、この問題こそが多くの山屋を悩ましていたのであった。ヒマラヤがある地域には幾つかの国がある。

中国、ネパール、インド、アフガニスタン、パキスタン、ブータンなどの国にヒマラヤの高い峰々が連なっている。登る山を決めるのは簡単そうである。簡単ではない。エベレストが未踏の山であったなら迷うことなくエベレストに出来るのだが、既に登られているから問題なのであった。

登る山を決める時に考えなければいけない条件は次のような事であった。

まず、山岳会のみんなから支持される山である必要がある。資金・資材の寄付が少しでも容易に出来るようなニーズ性や話題性があるとやりやすい。新聞社が記事を書いてくれて寄付依頼ができればいい。最も大事なことで難しいのは、遭難事故なく登れる未踏の山であることだ。山の容姿も重要だ。独立峰で魅力的な山容は、山の標高と同じく選択する際のポイントになる。

これとは別に、集められる資金で登れる山であることは言うまでもない。よっちゃんの山岳会が過去多くの海外遠征を行ってきたが、全て成功して事故も起こしていない歴史を汚すことは絶対に許されないことであった。

しかし、こんないろいろな事を考えてよっちゃんは行動していたわけではなかった。「とにかく、どこでもいいから海外遠征を出来るだけ早く行く事」しか考えていなかったが、この夢を実現する為には、どうしても必要なことは隊長になってくれそうな人を探すとであった。隊長に資金集めから対外的な交渉事などをすべてお願いしよう

とよっちゃんは考えていたのだ。ところが、山岳会の先輩は総会の時の様子からもわかるように、無関心というか関わりたくない面々ばかりに思えた。

よっちゃんは、そんな雰囲気を感じながらも何とか隊長になってくれる人を探し出そうと奔走した。週末になると参加希望の村松先輩を伴って山岳会のメンバーを尋ねた。

東京や名古屋、九州まで行ってお願いして回ったが、誰も相手にしてくれなかった。二ヶ月間ほど懸命に、証券会社で経験した電話や訪問といった営業を真似て頑張った。その間、出会ったり話し込んだ先輩たちとの人間関係が後々になって役立つのではあるが、その時には冷たい先輩ばかりだと思つた。

誰も新しい協力者を見つけれず前途が危ぶまれる状況になってきた時に、総会の夜に参加希望を我々に

表明していた先輩が突然、参加を取り止めると言いつつ出た。無理に参加をすすめるわけにはいかないから仕方がない。最悪の場合はこのメンバーだけで行かなければならなかった。

すぐにでも立ち消えそうになってきた遠征計画であるが、よっちゃんは、会社を辞めてきた手前あきらめる事は出来ない。どんなことをしても行きたい思いだけはあつた。だが、その手立てがない。よくわからないのであった。

一九七六年当時、ヒマラヤの情報といつても少なく、山城や入山許可などの情報がよくわからない。未踏の山というのは許可がおりない国境付近にあるとか、治安状況が悪い地域にある場合が多かった。ヒマラヤの山をねらっている山岳会は、国内や海外を問わず幾つもあった。希望する山は早く申請して許可を得て登らないと他の隊に登られてしまう。未踏の山に自分たちの初登頂の名を刻み込みたい思いは山男たちに共通していた。

よっちゃんは焦っていた。早く登る山を決めて山岳会の承認を得てすすめるわけば、登山申請すらできない。海外登山申請には日本山岳協会の推薦状がなければ受け付けてもらえないからだ。あやふやな状況が続けば、よっちゃんの金欠病から考えても難しくなることは明らかである。また、参加予定している現役学生にしてもどうなるかわからない。



あそこ、ヒマラヤは遠かった。

ガンになる人が多く、これを読んで下さっている方のなかにも、家族があるいはご本人がガンだという方があられるかもしれない。そんな方に私は聞きたい。「いまの西洋医学でガンって治りますか」。人によって、ガンの大きさや種類やらによって、受けた医療によって、治る人も治らない人もある、ということはおわかっていて。でも、聞きたい。義兄が肺ガンになり、森ノ宮の成人病センターで治療を受けている。抗ガン剤と放射線療法だ。義兄の妻、私の姉は、もともと自然食志向、健康オタク、さらに「奇人」的素質の強い人なので、ガンそのものより「抗ガン剤と放射線」で義兄が死ぬとおびえ、これらの治療法と戦うという、わけのわからない「ガン戦争」が今日も進行しているのだ。普通、ガン戦争といえは、本人が病氣と戦うことだと思うが、ウチの場合は、姉が西洋医学と戦っている。もし、西洋医学で、現在の治療で義兄が治るなら、私は姉に言いたい。「ねえちゃん、もうやめとき、ねえちゃんがしてること無意味やし、滑稽や」。だけど、私も姉と同じで、どこか信じきれない。

うところがあって、そこやったら、ガンの細胞だけを狙い打ちして治療するから、一般の放射線治療とか抗ガン剤と違って副作用も少ないし、治っている人が多いねんて」と教えてくれたとき、コレや!と思つて、姉に話した。健康保険がきかないので、300万円ぐらいかかるということだったが、姉は「安いやんか! 命、買えんねんから!」と言つた。その通りだ。安くはないけど、義兄はリストラ対象とはいへ一応、大きな会社のサラリーマン。姉は専業主婦だが、しっかり者で、大金はなくても小金は貯めている。抗ガン剤や放射線療法に徹底的に懐疑的な人(姉)が、最先端医療の粒子線療法ならいいのか? という、「いい」のである。西洋医学じゃないか? そうなのだけど、少なくとも、現在のガン治療(手術、抗ガン剤、放射線)ではない。

(姉さん女房なので、夫のことは呼び捨て)のガンは肺やし、手術もでけへんねんで。それに、もともと痩せてて、がっちりした人とは違うねんつ」。体形は関係ないと思うけど、姉は、細胞や内臓がダメージを受けたら、痩せつぼちの義兄などひとたまりもない、と思ひ込んでいます。それで姉は粒子線療法に飛びつき、コレしかないと思つた。だが、肝心の義兄が「これはまだ症例が少なく、ボクのガンには合わない」とあっさり却下。もともと義兄は理系というか、データを重んじるタイプで、しかも仕事でレントゲンの機械の修理なので、粒子線のことでも多少知っている。姉とは正反対の反応だった。姉は、いろんな手をつかって、義兄をたつのに連れて行こうとした。まず、正攻法で。「ねえ、行くだけ行つてみようよ。健康な細胞まで痛めつけることないやん。大変やで」。次に、泣きおとした。「お義父さんより、アンタが先に死んでもいいんか。そんな親不孝はないやろ」と、はるか遠方で長男ご一家と暮らしているので、普段、思い出すこともないお舅さんのことまで引き合いに出した。最後は、脅し。「たつに行けへんかったたら、私もう知らんで。洗濯も自分でしや」姉を打ちのめしたのは、セカンドオ

ピニオンなんてものは、実際の医療現場でちつとも認められていないことだった。少なくとも、姉にとつてはそうだった。たつに行くには、主治医の紹介状がいる。強引な姉に負けた形で、セカンドオピニオンを受けることに応じた義兄と担当医の間で、どんな会話が交わされたのか、正直なところわからない。だけど、「そうですか! ぜひ、行つてらっしゃい」と言つてくれなかったのは確かで、たつの方から返事をもらう、その連絡先を担当医は書いてくれていなかった。看護師長さんがそれを見て、「これでは迷子になってしまう」とあきれ、だまつてその空白箇所病院の印を押してくれた。医者がうっかり忘れたのか、「それなら、もう知らん」とイジワルをしたのか。もちろん、姉は後者だと決めつけ、医者と向き合なくなつてしまった。義兄はたつの行きをやめてしまった。

(AO)



「会社での忘れえぬ人1」

明石幸次郎

サラリーマン人生の最後の職場は、

それまで経験してきた資材、営業と違
い、鋳物工場の部品を作る、パート、派
遣、正社員で働く人を含めて従業員五
十人程の子会社に向となり、労務、
総務の仕事を受け持つ名ばかりの責任
者となりました。事務所は上司の四年
先輩の社長と事務の女性と私を含めて
たったの三人だけで、あとは現場で働
く人達でした。この子会社の権限は全
て工場長にあり、設備投資、人の採用
などは勝手に決められず、反対に業績
の悪化、労災、従業員の不祥事などの
問題があれば、その責任だけは厳しく
問われるだけで余り遣り甲斐の感じら
れない職場でした。

社長は以前から付き合いがあり、私
と同様、営業出身ということもあって
か考え方がよく似ていて、気が合い、
もう一人の事務の女性のSさんは派遣
会社から来ていて、国立大学の大学院
を出たが女子大生就職氷河期と言われ
た世代で、時期が良ければこの会社
にでも正社員として入れる能力を持ち
合わせている才媛でした。仕事も良く
出来、何よりも気転が利き、仕事上の

記憶力も高く、記憶力の低下が著しい
私らおじさん二人は度々このSさんに
助けられました。今でも感謝の気持ち
を忘れていません。

事務所は親工場の正門から一番離れ
た所にあり、近くには煤塵処理設備な
どがあり、工場全体が鋳物工場特有の
匂いと濃んだ空気が漂う中にありまし
たが、その中でも特に環境が悪い立地
条件にありました。二階建ての事務所
は一階には鋳物部品を造る現場があ
り、この部品を造る際に砂を化学品で
固めて焼くために発する音とその特有
の匂いと砂の埃、その上夏場は四十度
以上にもなる高温と湿気、典型的な三
Kの職場で、その上の二階に私の職場
がありました。一階からの音と振動に
慣れるまでには時間が掛かりました
が、夏の暑い時期は下の職場は汗だく
で従業員が働いているのに、上にある
事務所はエアコンを効かせた涼しい職
場に居たため、階下で働く人に対する
罪悪感の様なものを常に感じながら仕
事をしていました。

五十人近くいる現場の人達は、私が
今までに出会った人とは又違う、言わ
ば学歴社会からすると落ちこぼれた過
去の人生経験を積んで来た人が多く、
現場を任せていたN作業長は私より十
歳若く、本人曰く中学も出たか出ない
かで、沖縄から坊主頭のまま単身で大

阪に出てきて、それから職場を何度か
変わったということで、三十五歳で結
婚して子供が出来たので兎に角、家族
の為に安定した会社の社員に成ろうと
して、仕事は厳しそうであったがこの
会社に入ってきたと言う事で、このN
君は過去の自分の苦勞が良い意味で身
についていて、人の痛みがよく分り、
何よりも人に対して誠実で、仕事に対
して厳しく、本工(親工場の現場社員に
対しての呼び方)に対して仕事は負け
ていないという対抗心と自負心を持っ
た、人間的にも信頼できる男であった。

鋳物工場は危険な上、体力的にも環
境的にも(溶湯職場では五十度近くな
るし、夜勤もある)厳しい職場が多く、
その現場で働く人は仕事が終われば必
ず工場にある風呂に入り、ひと風呂浴
びて汗と汚れを落とし、さっぱりとし
て工場をあとにします。その後、大概
の人は工場の前にある居酒屋か立ち飲
み屋で、又は少し離れた大正駅前にあ
る行きつけの飲み屋で一杯やってから
帰るといのが習慣になっています。
仲間と酒を飲みながら職場の憂さを晴
らし、気分転換してから家路に着くの
です。

それは、子会社の従業員も同様です
が、私の上司の社長は酒が好きでない
上に酒の席で愚だ愚だ言う雰囲気が大
嫌いで、仕事の問題は仕事に部下と

話をして片付けて、仕事が終われば真直ぐ
に家に帰るのを信条としていました。現場
の人との話はそのように割り切ることが
中々出来なく、その為、仕事が終わったあ
との現場の人との「飲みにケーション」
は酒の弱い私が事ある毎に引き受けざる
を得ませんでした。

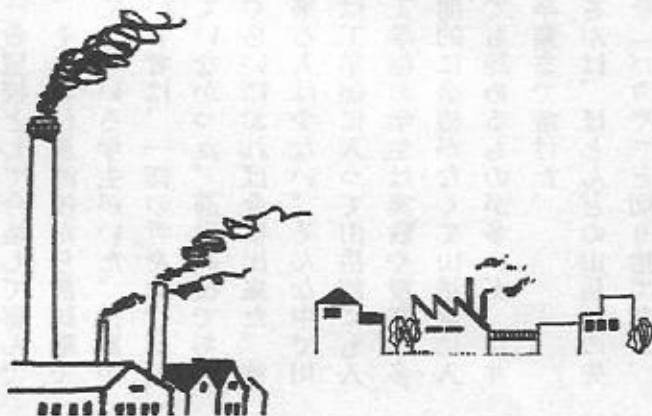
N君とも、派遣で来ているOさん、工場
OBで七十歳の技術指導で来て貰ってい
たHさんともよく飲みに行つて、悩み、不
満、問題点を聞きながら仕事の事を色々
教えてもらった。その酒を通して、短期間
で職場の人間関係、評価、人となり、又、
その人の過去の人生、生き方など腹を割つ
て話し合い、私のことも相手に分つて貰う
なりして、この人達との人間関係を築きま
した。この経験を通じて人間に関する労務
的な仕事は酒の力も借りることの大事さ
を改めて実感しました。

この酒仲間以外に印象に残った人は、工
場のトイレ、風呂掃除をパート従業員で、
きびきびと丁寧に働くKおぼちゃんとし
た。私が転勤して間もない頃、汗だくで風
呂掃除をしていたKさんを見たので、「今
度、子会社が変わって来たAです、宜しく。
ご苦労さんですね。いつも風呂やらトイ
レも綺麗にしてもらって有難う、序でにこ
の私の顔もひと摺りして綺麗にしてくれ
ませんか？」と声をかけたなら「面白い人や
なあ。なんぼワタシが相当タワシで擦つて
もその顔は、便器や浴槽と違つて綺麗に

ぐならへんわ。ハアハハー。けど、有難うと言つて声をかけて貰うのは、ホント嬉しいわ、これだけ綺麗にしても明日は又、汚くなっている。それだけにワタシの仕事は一日も休まれへんねんよ。今度来たAさん、アンタの顔は恐ろそうやが、よく分つてくれそうや？有難いわ」と話しながら手を休めず、一生懸命に小さい身体で力を込めてタワシで垢のついた浴槽を擦っていました。その姿は職業に貴賤はないということを実践している姿でありました。「ここはね、皆が仕事に疲れて、汚れた身体を洗うから浴槽は汚れるのは当たり前やけど、汚れ具合の程度が違うわ。出来るだけ綺麗にして気持ちよく風呂に入ってもらい、疲れと汗を落として頑張つて貰おうと思つてますねんよ。ワタシ偉いやろ、それ分つたらAさん、ワタシのパートの時給ちよつと上げてんか？」と突っ込まれたので「エエやんか、汗かいて風呂掃除で運動したら、スポーツクラブに高いお金出して通わんでも痩せますやんか。仕事してお金貰つてその上、運動して健康になる、一石二鳥のエエ仕事ですやんか？それに何よりも皆が綺麗にして貰つてKさんに感謝してるのと違いますか！」「Aさん、アンさんもよう言わはりますなあ」とその時初めて、Kさんと話を交わしました。それ以来、毎日の様にKさんが掃除をし

終わり一服している時間帯を見計らつて、話をしに行くのが私の重要な日課となりました。

Kさんは元大手都市銀行で働いて、職場結婚して旦那さんは阿倍野支店長までになった人で、旦那さんが定年になつたので、自分も時間が出来たので社会で働きたいと思つたが中々外に出て働くことを許して貰えず、何年かの説得を経てやっと許しが出た時に、偶々近所にある工場の掃除の仕事パート募集のチラシを見てこの子会社に入つてきたと言う事でした。このKさんは口が回り、頭の回転も速く、大阪のおばちゃん特有のユーモアもあり、話にも必ずオチが付いていました。又、人間観察力に富んでいて、何よりも人



に興味が旺盛と言う事もあり、それだけに情報通でありました。ただのお喋りのおばちゃんではなく、話にも一定の節度と相手のことを思いやる慎みがありました。Kさんがこの工場で働く人に対する判断基準は、利害関係もないだけに明確でぶれていませんでした。

誠実でコツコツと努力をして仕事が出来た人を評価して、反対に口先だけで要領よく、人に対し誠実でなく仕事に対する努力をしない人をこき下ろしていました。このKさんと事務のSさんのような女性は仕事上の利害関係が男性のようにないためか、クールなのか、冷静に私も含めた人を冷静に評価していました。

結局この職場には二年足らず居ただけなのに、子会社特有の弱者集団の集まりという意識が皆、心の中で共通として持つていたためか、弱い者に対しては優しい人が多くいたこともあり、この弱い私にも優しく接して貰い、サラリーマン人生の中でも中味の濃い人間関係を築いた職場でありました。この職場を最後に会社を途中で辞め、数年が経ちましたが、この職場の人達から時々、私のことが心配でと言うことで声が掛かり、飲んだり、歌つたりしています。その中には掃除のKおばちゃんも必ず加わつて、持ち上げられたり、落とされたりしています。

釈迦仏教

ある人がインド・カルカッタで見た思想風景――。

路上で、ホームレスの老人が口から泡をふき、汚物をたれ流して、瀕死の状態で倒れている。そこに二人の女学生が通りかかった。老人を汚れたもののように避けるわけでもなく、気にとめる様子もなく、バナナの皮が落ちてくるくらい感じて、楽しそうに語り合いながら、すれすれを通りすぎていった。

この場面を見て、思想的な意味ですばらしいと思つたという。愛とか慈悲というのは必然ではない、と。

彼女たちの態度は、死に無関心なインド的精神性であるが、哀れみの心はない。そんな人情的なところを超えてしまつてゐる。

お釈迦さんの梵行は愛を禁じていこうという意志的努力である。瀕死の老人を哀れむ心はあつても、女学生のように無関心を装つて通りすぎていく、それがお釈迦さんの仏教である。

慈悲を採つて、老人をたすけるのが大乘仏教だ。救急車を呼ぶだけではなく、直接的にみずからの手でたすけなければ、最後の最後までたすけなければいけない。涅槃に入るまでたすけつづ

梵店主

山の先輩の中で最も長く利害関係なしで途切れることなく付き合ってきた人が田中さんであった。長く続いた訳の一つに私が田中さんに持ち続けた好奇心と尊敬のまなざしがあった。

大学というところには、いろいろな人間が集まっているが凡その学生は、適当に勉強して安定した職場に就職し普通の人生を送れば良しとしている。この生き方をバカだと切り捨て、自身も破天荒な人生を悠々と生きた田中さんは私にとってもどこか救われる人間性を持っていたのであった。

田中さんは、西宮高校では、アメリカン・フットボール部に入り夢中になっていた。当時に流行したスポーツで兄妹ともアメリカンに関わっていく。弟も関学でアメリカンをやり活躍する。姉は京大のアメリカンの監督をする人と結婚する。全ては西宮高校のアメリカンから始まっている。

田中さんは大学に入るとアメリカンには入らず山岳部に入った。当時の部には随分いろいろな先輩が多くいたと言う。坊ちゃん達が集まったようなクラブで、山登りの事をよく知っているものは限られた部員で大半の部員達は山登りを初めて経験する。

田中さんが入部した時代の山岳部員の多くは、裕福な家の生まれの者が多く、厳しい冬山への山行きやスキーなどへの憧れは強かった反面、山登りには不慣れであった、と言う。山岳部員も年代によって部員が代わり事情は異なっていく。

そんな山岳部であったが、同期に入部してきた川井さんがいた為に、田中さんは辞めることなく続けられた。川井さんは秋田の出身で実家は電気工事を営む。長男である彼は家業を継ぐ為に阪大工学部を目指したが受からなかった。喧嘩強く人情家で賢かったため田中さんとは直ぐに仲良くなった。

よつちゃんの大学には、国立大学を落ちてやむなく入学してきている者と、第一希望校として合格して喜んで入学者。それと付属高校から無試験で入学してきている学生がいた。付属から来ている者は、一部の者を除けば勉強をしていなかった。進学高校であれば中位ぐらいにおれば合格出来た。秋田から来る人は少ない。そんな中で川井さんは工学部に入って山岳部にも入った。工学部の学生は実験や授業が多くて時間的に余裕がなくて山岳部に入ってきて辞めるものが多いが、川井さんは卒業まで続けた。

田中さんは、ほとんどの山岳部の先輩後輩を「バカや」と切り捨てたが、

この川井さんだけは終生尊敬して兄弟以上とも思える親交を持ち続けた。川井さんが五十過ぎにガンを告知され末期に近づいていた時、田中さんは私に真剣に頼みに来た事があった。

「医者が見放したように言うが、俺は希望を持っていて。タイの奥地に生息するミツバチの蜂蜜のロイヤルゼリーを飲ませれば効くかもしれない。あいつに飲ましてやりたい。ただロイヤルゼリーは鮮度が大事だから取れたてがよいと聞く。お前、チエンマイへ買いに行き、急いで帰国し秋田へ直行して川井に飲ませてくれへんか。頼むわ！」

田中さんは、川井さんを見舞って秋田から昨日帰って来たばかりだと言う。十日ほど前にも行っていたから、何度秋田まで通っているのかと思うと直ぐには断わることが出来なかった。大阪から秋田までは、夜行寝台特急・日本海に乗っても遠くて金もかかる。決して経済的に余裕のある田中さんではない。かなり無理をしているに違いないが、なりふり構わず助けたいという印象だけであった。

当時、私は百貨店のテナントで店を営んでいたので時間的にも経済的にも余裕がなかったので返事ができなかった。そんなことがあった日から十日ほど経った昼頃、川合さんが亡くなったという知らせが入った。

田中さんにとって川井さんほど大事な人はいなかったと今でも思える。もし、川井さんが山岳部にいなかったら、田中さんは退部していたかもしれない。

もうひとり大事な友人がいる。北村先生である。先生とはアラスカ遠征からの付き合いで相性がよかったようだ。田中さん夫婦の仲人でもある。

「北村泰一」といえば、あの映画「南極物語」のモデルになった人だ。北村先生は第一次南極越冬隊の最年少隊員として犬係をつとめた。一次隊と交代で第二次越冬隊が昭和基地に向かうとき、天候悪化でたどり着けず、一次隊は昭和基地を小型機で緊急避難する。

そのとき断腸の思いで数頭の樺太犬を鎖につないだまま置き去りにするのである。もはやだれも犬たちの生存を信じるものはいなかった。ところが翌冬、二頭の生存が確認される。第三次越冬隊に参加した北村先生は、この二頭の犬、タロとジロの兄弟犬と感動の再会を果たすのだ。

その北村先生が田中さんに言っていたという言葉をいつもよく自己暗示をかけるように繰り返していた。

「先生は、いつもおれに言うんだよ。田中君はえらいよ。私のように国立大学の先生で飯食っているのではなくて、自分で商売して食っているんだから、と誉めてくれるんだ」

「仏と鬼」

母が入所していた老人ホームに家族会があった。メンバーは入所者の家族や親戚で、約六十人が入会していた。その会長を三年間つとめた。常時、参加するのは十二、三人だった。

折につけ、体験談を話し合った。誰もが老人ホームに入所できて喜んで来た。

「地獄で仏に出会ったようなもの」と言う人がいた。

その人の母親に徘徊が始まった。昼夜問わず、急に外に出て歩き出した。その都度、家族が付いて回った。自宅に監禁すると気が狂ったように叫ぶからだ。本人が得心するまで徘徊に付き合うしかなかった。その間は緊張の連続だった。急に道路を渡ろうとするし、信号は無視するから危なくて仕方がない。

その人は、やむを得ず会社に長期休暇を取って介護に専念した。家族も応援した。しかし、介護は想像を超える重労働だった。家族全員が寝不足と疲れで精魂尽きかけた。

ふと「母を殺して自分も死のうか」と頭をよぎるようになった。そんな時、老人ホームに入所できる



順番が回って来て、危機を回避できたのだった。
「介護は仏心で始めたものだが、続けるうちに鬼の心が変わっていた」とその人は述懐していた。(龍)

俳句

義女

【ダージリン紀行】

- 谷底にひろがる霧やダージリン
- 斜面建つホテルはまるでトレーニング



ダージリンからカンチェンジュンガを望む



マニ車をまわす巡礼者

- 山肌へへばりついてる家や花
- バザールや民族服のるつぼかな
- 朝日あびカンチェンジュンガパノ
- ラマシヨ
- 線路巾61のトイトレイン
- ヒマラヤはけわしきけれど桃源郷
- 夕暮れて部屋の暖炉赤々と
- おだやかに終りて今日の煙かな

【シツキム記】

- シツキムは入国許可いる元王国
- 山谷山四駆がかける崖の淵
- マニ車まわしまわして今日祈る
- ユタンポのぬくみと共に旅の夢
- サル鳥も出入り自由ホテルドア
- ふることく星をながめてチャイプス

初恋の人

友人が憧れた高校時代の彼女が営む飲み屋を偶然見つけたと言うので、私は興味津々でついていった。

繁華街の裏手にあるカウンターだけの小さな飲み屋であったが、独りで数人の客を相手にしているママは斉藤慶子に似た美人であった。友人が彼女の高校での思い出を語るところでは、「賢くて髪の毛が印象にのこる女の子だった」と言う。

身近にみるママは、確かに美少女の面影があった。友人はただ見とれるだけで、酔っていたのか会話も虚ろだった。

そばに坐った私は、酔った勢いで話しかけてみた。「ママさんは、これまでの人生で好きな男に出会ったとき、男に好意があることを伝えようとしたか?」

迷うことなくママは「そんな事した事ないわよ。男の人が言い寄ってくるのを待ただけだったわ」。

「そらあかんわ。いい男がいたら好きやといわな」と私が言うと、「どない言うのかわからんし。受身よ」。

「なーんだ。言えばよかったんだよ」と私が友人に言っても、彼は酔ったのか返事しなかった。男の人生を決めるのは勇気だと思った。(嘉)

風は虎にしたがう

虎は昔から神秘的なものとされる。丑寅の方角を鬼門といって、土をまき塩をまく。北東の方角が敬遠されてきたのも古くからのこと。

豊かで苦痛の少ない便利な生活の中では何かが失われているような気がする。

これが当然、何故お礼の言葉がないのかと圧力が加わってくるのを身辺に味わう。

「艱難汝を玉にす」と言われたように真正面からぶつかってゆき、何か糸口をみつければ、おのづと道が開けてゆくのだろが、マスクをはずして下さい、〇〇さん。

「どう活かす、私のいのち」私のスローガンにしているのだが、先日も皆さんと共に。

「亡き主の手をたづさえて 石畳」お参りしてきたのだが、毎日のくらしを見つめるとき、日常のありきたりな見慣れたものの中では、初心を忘れずに暮らしてゆくことはむずかしい。

昔の人は、月の初めを「おついたち」といって大切にし、十五日にはお寺や神社まいりをし、月日の流れの中に、句読点をつけたものだが、今はややもすると、時間に追われる

毎日。

掃除、お灯明あげ、仏さんに給仕する。このことズバリが、自分の心に安らぎを与えてくれるのを覚えるのは何故か。年のせいなのか。

その行事を毎日欠かさず実行している友達を身近にもち、はげまされ、それを次の世代に如何にして継承していくのか。大事な仕事だと思おう。

こういう都都逸もある。「こぼれ落葉を あれ見やしやんせ 枯れて落ちてもふたりづれ 水入らず幸せに暮らすか」ともども枯れて落ちるか

いづれ一人になるんだよ 涙しながら道行きの結末は誰に」

想いを新たに

「結婚指輪してますか？」という新聞のくらし一頁を見て、ハツと心によみがえるものがあり、そうだ、私も主人からもらった指輪。「安ものだけど」と照れくさそうに渡してくれた指輪。当初若かったせい、なあんたこんな安物と一度も指にはめたこともなく、相手も別に気にしている様子もなく、あつというまに六十年過ぎてしまった。

指輪自体がよく買えたんやなあ。とか、何十年も前に指輪をする習慣があったのかどうか？

さて、あの指輪どこだったのかな

あ。落ち着いて、落ち着いて、自分の心を制しながら、やつと出てきました。キチツと箱に入ったまま、受領月日まで書き入れて、私らしいやりかた。

いつ指にはめてくれるのかなアというところでしようね。静かに目を閉じて、改めて、「ありがとう」と心からいえました。

この指輪は、二人の生き方を、ズツと箱の中から見てたのでしようか。撫でながらやつと葉指に納めてみたら、いろんな思い出が浮かび、とめどなく涙があふれでて、男と女、夫婦、親子、家族。様々な愛のかたちを指輪一個で誰もが心のどこかで求めているのかも知れませんね。



編集後記

前回から新人ライターが参加してくれています。ペンネーム、AOさんです。プロの書き手です。ポランティアで小誌を応援して頂くことになりました。ありがとうございます。

「田中先輩と私」新連載を始めました。過日、亡くなった、私の大学山岳部の先輩の田中さんの思い出です。ユニークな方でしたので、読者の皆さんにも知って貰いたくて筆を執りました。

明石さんの知人が次回より連載を初めて書いてくれると知らせてくれました。ありがたいです。

私の友人も、何か書くと言ってくれます。皆さんの暖かい応援で何とか原稿が集まりそうです。正月に田舎に帰ったら、叔父と母から「芥川だより」を続けるようにとカンパを貰いました。

皆さんの支援で発行してまいりますので、よろしくお願ひします。

(嘉)

商店街歳時記

天神祭り

2月25日(木) 26日(金)

☆☆☆

早春のお仕立承り会

2月8・9・10日

☆☆☆

着物から服を仕立てます

雫~ぼん~